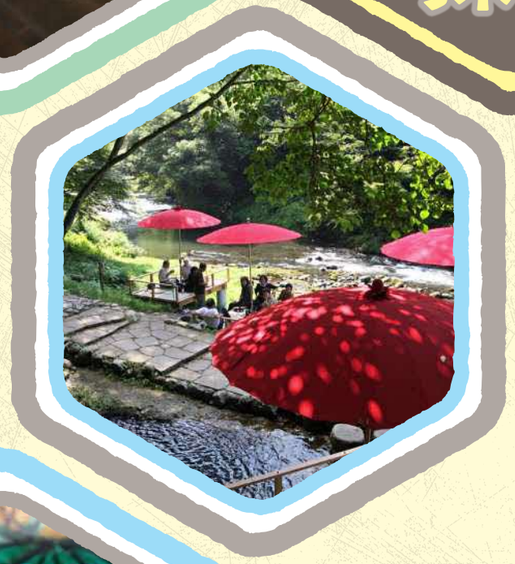
人々の営みと
文化が語る
SDGsを
味わおう

加賀温泉郷×探究



加賀温泉郷×探究
～人々の営みと文化が語るSDGsを味わおう～

2023年2月発行

発行・問い合わせ先：一般社団法人加賀市観光交流機構・加賀市
石川県加賀市大聖寺南町二　41番地
TEL 0761-72-7900

制作：株式会社トモノカイ

本書に掲載のSDGsロゴは国連の承認を受けております。なお、本書の内容は、国連、その職員または加盟国の見解を反映するものではありません。
国連の「持続可能な開発目標」については、ウェブサイトをご覧ください。https://www.un.org/sustainabledevelopment/
本書の全部または一部を無断で複写・複製することは、著作権法に基づき禁じられています。本書の解説書・指導書・ワークブック並びにこれに類するものの無断発行を禁じます。

名前

年　　組　　番

はじめに

加賀市を訪れる皆さんへ

石川県加賀市は、今も土地に息づく伝統工芸、個性的な温泉地や歴史漂う城下町、活気ある漁港、四季折々に美しい自然とその自然から育まれる山海の幸など、さまざまな魅力があふれる街です。その風土の力は、多くの著名人や文化人を生み、またひきつけてきました。

今回の旅行では、加賀市のもつこれら魅力の数々に触れ、加賀市の人々が土地の歴史をどのように重んじてきたかを体感できることでしょう。そして、それらをどのように未来につなげていきたいかを想像してみてください。加賀は、古いものを大切にしながらも新しい物事も取り入れていくという意識が根付いている地域です。これからの時代を見すえる加賀市やその人々の歩みは、おのずとSDGsにつながっていることがうかがえます。その思いを感じ取った皆さん一人ひとりが、今回の旅行を通じて見つけた課題を自分ごととしてとらえてみると、自分の住む地域や身の回りのまだ見えない課題に対しても向き合えるようになっていきます。今回の旅行をきっかけに、こうして自分の身近なところにも視野を広げていくことができれば、きっとこれからの世界がよりよいものになっていくはずです。

このノートは、加賀市の多様な魅力を体感することが、これまで気づかなかったことへ目を向けるきっかけとなり、自らの学びを深めていけるように作られています。例えば、20ページの訪問する各スポットで撮影した写真にハッシュタグ(#)をつけるワークでは、皆さんが普段SNSで行っているように、自分の感じたことや思いを一言のハッシュタグ(#)で表します。それぞれのスポットで感じたことに共通点を見出せれば、それが「加賀ならでは」の魅力の発見につながっていくことでしょう。また、SDGsの実現という大きな課題に対し、加賀市での体験で感じたことを照らし合わせて考え続けることで、探究的な視点を養うことができます。

温泉街の街歩き、美術館や記念館の訪問、おいしい食事など、加賀市の魅力を存分に味わいましょう。そして、古いものと新しいものどちらも大切にする「加賀ならでは」の学びを、ぜひ現地で体感してみてください。

C O N T E N T S

このノートの構成

このノートは、事前学習(1・2章)・現地学習(3章)・事後学習(4章)の3つのパートで構成されています。加賀市への旅行で感じたことや気づいたこと、考えたことを踏まえながら、SDGsを自分事としてとらえられるように、以下の流れで学習しましょう。

はじめに …… 2

1章　加賀市を知ろう！
- ・加賀市の全体像 …… 4
- ・加賀温泉郷 ① …… 6
- ・加賀温泉郷 ② …… 8
- ・文化スポットとSDGs ① …… 10
- ・文化スポットとSDGs ② …… 12

2章　加賀市の探検準備
- 【事前学習】① …… 14
- 【事前学習】② …… 16

3章　加賀市探検中の気づき
- 【現地学習】 …… 18

4章　加賀で学んだこと
- 【事後学習】① …… 20
- 【事後学習】② …… 22

SDGsと地域の魅力

「SDGs」とは**「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」**の略称です。環境や教育、貧困問題の解決など17の分野にわたる目標と、さらに詳しい169のターゲット、232の指標で構成されています。**「誰一人取り残さない」という大きな理念のもと、全ての国連加盟国が2030年までの目標達成を目指して日々取り組んでいます。**

SDGsは複数の視点がつながった取り組みであるため、一つの課題だけを解決すればいいというものではありません。17の目標がばらばらに存在しているのではなく、それぞれの目標が深く関連し合い、影響し合い、連動し合っているからこそ、それぞれの目標における相互のバランスを取りながら、最適な解決策を見つけていく姿勢が大切になります。

まずは自分の身の回りから始め、徐々にその範囲を広げていく。小さな取り組みの積み重ねが、日本全体や世界の未来の課題の解決につながります。

配慮すべき3つの領域(生物圏・社会圏・経済圏)

SDGsでは、**「生物圏」「社会圏」「経済圏」**の3つの領域に配慮しながら、持続可能な方法で地域の開発を進めていくことが大切とされています。

左の図は「ウェディングケーキ・モデル」といい、スウェーデンのストックホルム研究所が考案した、SDGsの構造を図式化したものです。生物圏の上に社会圏が、またその上に経済圏があり、全ての事象がつながっていること、それぞれの目標が相互に関係しあっていることを、目で見て理解することができます。

SDGsは複雑で難解な問題ですが、だからこそ構造的にとらえることが必要です。自分が加賀市での旅行や身近な地域についての考察を通して抱いた疑問や課題が、このモデルのどこに位置し、どんなことと関連しているのか。整理して考えてみることが、その課題について広く深く探究していく際の助けとなるでしょう。

1章

加賀市を知ろう！

加賀市の全体像

石川県加賀市

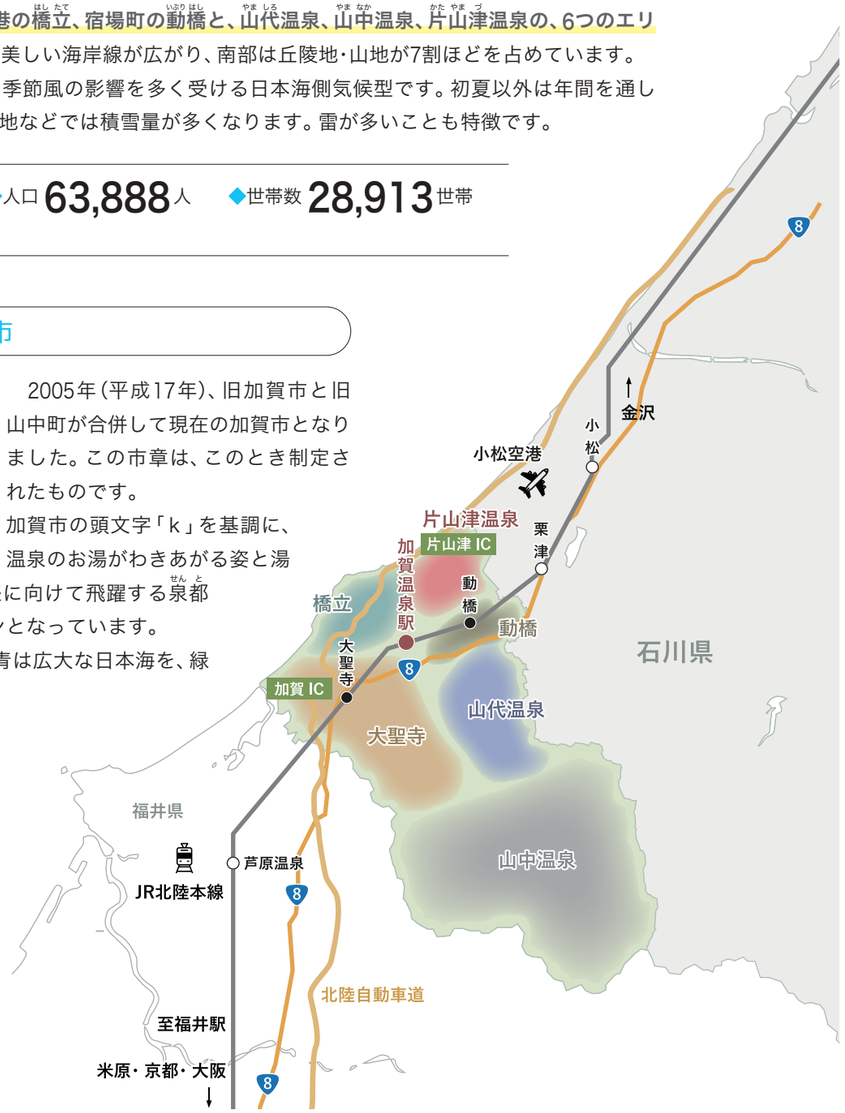
加賀市の概要

加賀市は、南北に長い石川県の南西の端に位置しています。日本海に面し、北東側は小松市、南西側は福井県と接しています。金沢市からは40キロ余り南西に離れており、独自の文化や伝統工芸をしっとりと育んできました。

市は、城下町の大聖寺、漁港の橋立、宿場町の動橋と、山代温泉、山中温泉、片山津温泉の、6つのエリアに分けられます。北部には美しい海岸線が広がり、南部は丘陵地・山地が7割ほどを占めています。

気候は、冬には北西からの季節風の影響を多く受ける日本海側気候型です。初夏以外は年間を通して降雨が多く、冬は南部の山地などでは積雪量が多くなります。雷が多いことも特徴です。

◆面積 **305.87**㎢　◆人口 **63,888**人　◆世帯数 **28,913**世帯
（2022年7月1日現在）



市章から見る加賀市

加賀市の市章

2005年（平成17年）、旧加賀市と旧山中町が合併して現在の加賀市となりました。この市章は、このとき制定されたものです。

加賀市の頭文字「k」を基調に、温泉のお湯がわきあがる姿と湯気をイメージしながら、未来に向けて飛躍する泉都の加賀市を表現したデザインとなっています。

使われている3色のうち、青は広大な日本海を、緑は自然豊かな大地を、黄色は温泉を表しています。この3色の3つの図形には、市民が互いに触れ合い（融和）、力を合わせて（協和）、加賀市が繁栄していくという意味もこめられています。

自分の住んでいる街にも、市章やシンボルマークがあるはずです。どんな意味がこめられているか、調べてみると新たな発見ができるかもしれません。

おだやかな街、加賀市

日本海側の石川県では、冬の季節に日照が少なく低温のぐずついた天気が続くこともあります。加賀市の、特に平野部は豪雪地帯である北陸地方としては降雪量が少なめです。

加賀地方は、大きな災害の少ない地域でもあります。能登地方などに比べると地震も少なく、台風の接近数も多くありません。加賀市は、霊峰白山に抱かれ、豊かな里山と3つの温泉地、山海の幸にも恵まれた、おだやかで暮らしやすい街なのです。

時代の変遷がつくりだす歴史と未来

越前（福井県）、加賀（石川県）、越中（富山県）や越後（新潟県）を含めた北陸は、日本有数の米どころとして古くから重要地域でした。江戸時代前期には、松尾芭蕉が「おくのほそ道」の旅で奥羽から北陸へ向けて街道を歩き、加賀の各地でも名句を残しています。

江戸時代中ごろから明治後半にかけては、大阪と北海道を結び、日本海を行き来して商売をする北前船が活躍しました。漁港・橋立地区は北前船の船主や船乗りでにぎわい、日本一の富豪の村として栄えました。豪邸が並ぶ町並みは、往時の様子を伝えています。

現在、陸路に大きな変化が訪れています。鉄道においては、1997年に長野、2015年に金沢まで開業した北陸新幹線が、北陸を経由して東京・大阪間を結ぶプロジェクトとして計画されました。2024年春には福井県の敦賀まで延伸し、石川県内では小松駅、加賀温泉駅の2駅に新幹線が停車します。

新幹線の開通により、東京から加賀地方への時間・距離のアプローチは、飛躍的に向上します。1997年に全線開通した北陸自動車道と並ぶ、陸路の大きな柱となるでしょう。

海路によって発展してきた加賀市は、新幹線という強力な陸路によって、今後どのような変化を遂げるでしょうか。石川県内全線開通によって、人的交流が広がり、歴史と未来が融合した新たな文化やビジネスが生まれることが期待されています。

加賀はおいしかが？

スマートシティ加賀

デジタル技術を生かし生活の利便性を向上させるスマートシティ構想。国内外で進められていますが、加賀市はいちはやくスマートシティ化に取り組んだ自治体です。加賀温泉駅周辺では、北陸新幹線の開業を見すえ、未来型の街を構築するプロジェクトが進んでいます。

温泉や自然に恵まれ、豊かな伝統や文化をもちながら、実は最先端のスマートシティでもある街。若者も高齢者も住みやすく働きやすい、市外の人も何度も訪れ暮らしたくなるような街。加賀市では、さまざまな先進的な取り組みを進めながら、そんな街づくりを目指しています。

1章 加賀市を知ろう！

加賀温泉郷①

加賀温泉郷とは

加賀温泉郷は、霊峰白山の恵みに育まれた**片山津温泉・山代温泉・山中温泉の総称**です。

加賀市には、3つの温泉――柴山潟の湖畔に広がる片山津温泉、渓谷美にいろどられ1300年の歴史を誇る山中温泉、温泉郷で最大の温泉街が広がる山代温泉があります。

温泉郷は、室町時代の僧・蓮如や江戸前期の俳人・松尾芭蕉、戦国武将・明智光秀、歌人の与謝野鉄幹・晶子夫妻など、多くの著名人に愛されてきました。大正～昭和期の芸術家・北大路魯山人が、山代温泉に半年の間滞在して、旅館の看板を彫ったり加賀の海や山の幸を楽しんだりしながら、現地の旦那衆と交流したことも広く知られています。

コミュニティの中心「総湯」

温泉街の中心には「総湯」があります。総湯とは**旅館などの外にある共同浴場のこと**で、北陸地方独特の言い方です。温泉街は、総湯のまわりを温泉宿が囲む形で広がっており、このように作られた街を「湯の曲輪」と呼びます。2つの総湯が並ぶ山代温泉は、今もはっきりとした湯の曲輪を残しており、昔ながらの温泉街の姿を今に伝えています。

総湯は**街の共有財産であると同時に、地域コミュニティの中心**でもあります。住人たちは、自分のお風呂セットを持って毎日総湯に通い、情報交換をしながらコミュニケーションを楽しんでいます。温泉街の子供たちは、総湯での交流を通して、街の大人たち皆に見守られ、育てられているのです。

3つの温泉地の総湯は、九谷焼のタイルを用いた昔ながらの浴室であったり、格調高い劇場と併設していたり、ガラス張りの現代建築だったりと、施設にもそれぞれ特色があります。総湯を訪れると、温泉の個性を味わいながら地元の人と交流することができます。

総湯は今も、観光客にとっても地元住民にとっても、体と心を温めて癒してくれる、街の大切なシンボルです。あなたの地域にも、総湯のように住む人のよりどころとなる場所がありますか。調べてみましょう。

山代温泉　湯の曲輪

山中温泉　山中座

絶景に望む片山津温泉

片山津温泉は、**日本海と接続する柴山潟から湧き出している温泉**です。霊峰白山の雄大な姿を望む抜群のロケーションで、一大温泉湖畔リゾートとして発展しています。

1653年、この地を治めていた大聖寺藩二代藩主・前田利明公が鷹狩に柴山潟を訪れた際に湖面に水鳥が群れていたのを見て、湖底の温泉の存在を発見したと伝えられています。その後、利明公をはじめ多くの人が温泉を利用しようと試みましたが、**源泉が水中にある**ため工事は難航、発見から200年以上経た明治時代初めになり大がかりな埋め立てが行われ、ようやく温泉地として開業しました。

片山津温泉では、加賀温泉郷では比較的歴史の浅い温泉だからこその、新しく魅力的な取り組みが行われています。北陸地方屈指の規模を誇る温泉街を歩き、街のさまざまな取り組みを見つけてみましょう。

＼ 片山津温泉の総湯と配湯所 ／

コミュニティの中心である総湯は、現代的なガラス張りの建築でありながら湖や街の風景に自然と溶け込むデザインで、カフェやオープンテラスなど、今の時代にふさわしい市民にも観光客にも開かれた機能を備えています。

温泉街の中心には、大きな三角屋根が目を引く配湯所もあります。屋根の下の寝殿造の建物には片山津温泉の守護神・薬師如来像が飾られており、源泉からひいてきた湯を各旅館に配る役目を果たしながら、温泉が街の人々の暮らしと密接に関わってきたことを語っています。

片山津温泉の総湯

＼ 柴山潟と大噴水 ／

柴山潟は、白山から昇る朝日や日本海に沈む夕日によって、1日に7度色を変えるといわれる美しい湖です。柴山潟の中心で高さ70メートルもの水を噴き上げる大噴水は、冬に潟を訪れるコハクチョウをイメージしたもので、湖面にダイナミックに弧を描きます。8月には毎夜湖上から花火が打ち上げられ、湖面に映る花火の美しさが温泉の名物となっています。

＼ 浮御堂 ／

柴山潟の湖面に浮かぶように建てられたお堂で、片山津の伝説にちなんだ弁財天と龍神がまつられています。泉源地のある湯の元公園から浮浅橋で渡ることができます。夜には、大噴水とともにライトアップされ、名スポットとなっています。

＼ 首洗池 ／

1183年、源平合戦・篠原の戦いで、源氏の武将木曾義仲がかつての恩人の斎藤実盛を討ちとったのち、泣きながら実盛の首を洗ったと伝わる池で、篠原古戦場の跡である手塚山公園の中にあります。池のほとりには、義仲の銅像や芭蕉の句碑が立っています。

他のスポット例

●愛染寺　●芸妓検番　●中谷宇吉郎 雪の科学館　●足の湯 えんがわ　など

加賀はおいかが？

大聖寺

大聖寺は、百万石で名高い加賀藩・前田家の支藩として、1639年に生まれた大聖寺藩の城下町です。古くは「大聖寺」というお寺があったとも伝わりますが、現存はしていません。

初代藩主・前田利治は、鉱山開発や九谷焼などの産業に力を入れ、藩の財政のいしずえを築きました。利治は茶道や能もよくたしなんだと言われています。大聖寺には藩主の休憩所であった江沼神社・長流亭をはじめ、江戸時代当時の建物や町並み、地名が多く残っており、今も歴史や文化の香りを感じることができます。

江沼神社　長流亭

1章 加賀市を知ろう！

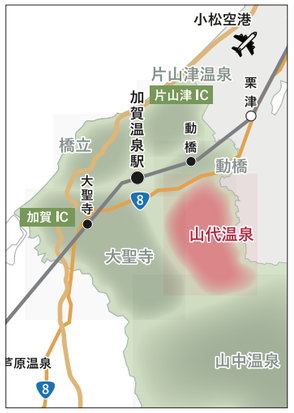
加賀温泉郷②

歴史と現代が共生する山代温泉

山代温泉は、**奈良時代の高僧・行基が、725年白山へ修行に向かう旅の途中に一羽のカラスが体を休めていたことから見つけたと伝わる温泉**です。1300年の歴史をもち、伝統や文化の香りが漂う山代温泉の街では、古総湯と総湯の二つの総湯を湯の曲輪が囲み、由緒ある寺社が見守るように建っています。

山代温泉は、伝統あるものとモダンなものとが常に融合しながら、普遍的な魅力を発信しています。明治時代の総湯の壁には、「ハイカラ」と呼ばれた当時の最先端の西洋風ステンドグラスと、伝統的な木組み工法やこけらぶきの屋根、拭き漆や九谷焼のタイルとがいっしょに使われていました。

2009年に老舗旅館の跡地に総湯が新築されました。赤瓦に杉板張りの外壁をはり巡らせた加賀の伝統的家屋のような外観に、新型の熱交換システムを導入した共同浴場で、住民の憩いの場となっています。



古総湯

2010年、元の総湯の場所に1886年（明治19年）築の建物を復元した**「古総湯」**が建てられ、入浴法も当時の雰囲気を再現。あわせて町並みも整備されました。この取り組みは、2012年度の**「都市づくり、地域づくり、コミュニティづくり」の部門でグッドデザイン賞を受賞**しました。

山代温泉　古総湯

湯の曲輪

山代温泉は、総湯を囲んで旅館や商店が並ぶ江戸時代の頃の温泉街「湯の曲輪」の姿を残しています。湯の曲輪は、総湯に通い街を散策して滞在する昔ながらの温泉文化をいまに伝えています。

魯山人寓居跡（いろは草庵）

書家・美食家・陶芸家の北大路魯山人が、温泉旅館の看板を彫るために1915年（大正４年）の秋から約半年間滞在した建物です。魯山人は、一流の文化人である旅館の旦那衆たちと書や美術を語り合い、加賀の食材を楽しみました。魯山人を見出した金沢の漢学者が食卓に自作の器を並べていたこと、九谷焼の窯元で作陶や絵付を体験したことが、魯山人が陶芸の道に魅せられるきっかけとなりました。

薬王院温泉寺

温泉を発見した高僧・行基が、薬師如来像などの仏像を彫り安置して創建した、山代温泉の守護寺。高僧・明覚が住職となった平安時代中期に隆盛を迎え、十一面観世音菩薩像、明覚上人の供養塔・五輪塔など、多くの文化財があります。

加賀はおいかが？

「あいうえお」誕生の地

古代インド言語の研究者でもあった明覚上人が、温泉寺で1093年に記した書物「反音作法」には、日本最古の五十音図が載っています。山代温泉は、五十音の発祥の地と言われているのです。

温泉寺の境内から萬松園までの石の階段は「あいうえおの小径」と呼ばれていて、五十音が記された九谷焼の陶板が１枚ずつ埋め込まれています。日本語の歴史に思いをはせながら上ってみましょう。

他のスポット例
●九谷焼窯跡展示館　●はづちを楽堂　●服部神社　●栄螺堂　●山代スマートパーク　など

自然と文化にいろどられた山中温泉

山中温泉は、加賀温泉郷の中で最も山深い地域に位置しており、鶴仙渓をはじめとする豊かな自然に囲まれた名湯です。開湯は1300年前と伝わりますが、平安末期に能登の地頭・長谷部信連が宿を開いたのが山中温泉の旅館の始まりだと言われています。俳人・松尾芭蕉が気に入り、8泊9日もの間滞在して句によんだことも有名で、**温泉街のあちこちで芭蕉の足跡を感じる**ことができます。

昔は総湯を中心に温泉街が広がっていました。当時の旅館は宿泊に特化した施設で、現代のように内湯や厨房はなく、入浴は総湯、食事は周囲の料亭や仕出し料理等を利用していました。温泉街全体で役割分担ができていたのです。

しかし、昔ながらの分業制の温泉街は、しだいに現代にはそぐわなくなってきました。1998～2003年に、街の中心部において、一部店舗の「1店舗2業種」への取り組み、電線の地中化や条例に基づいた自然と調和した景観の形成、歩行者と車両双方が安全な道路の整備などの街なか再生事業が行われました。山中温泉は、今も引き続き、住民にも観光客にも利用しやすい持続可能な街づくりに力を入れています。

鶴仙渓

温泉街に面した大聖寺川上流の渓谷で、古くからの山中温泉を代表する名所です。全長1.3kmの遊歩道が整備されていて、総ひのき造りのこおろぎ橋、ユニークな造形のあやとりはし、アーチ型の黒谷橋の三つの橋や、松尾芭蕉をまつる芭蕉堂などを見ながら、渓谷美を味わうことができます。

あやとりはし

総湯 菊の湯

男湯、女湯が別棟になっていて、開湯以来変わらぬ場所には、天平時代風の建物の男湯が建っています。「奥の細道」の旅で訪れた芭蕉がよんだ句「山中や　菊は手折らじ　湯の匂い」にちなんで「菊の湯」と名づけられました。曲線美が印象的な格調高い建築の女湯は、伝統芸能の「山中節」を鑑賞できる劇場「山中座」と併設しています。

山中温泉　菊の湯

ゆげ街道

総湯・菊の湯からこおろぎ橋までの目抜き通り。伝統工芸の山中漆器や九谷焼のギャラリー、土産物店、個性的なお店やカフェなどが並ぶ、山中温泉の中心街です。電柱を地下化して幅の広い歩道が整備されていて、安心して散策することができます。

九谷磁器窯跡（九谷古窯跡）

温泉街から大聖寺川を14kmさかのぼったところにある、九谷焼の窯跡。古九谷（江戸時代初期の約半世紀の間に大聖寺藩前田家の命で、九谷村で焼かせた磁器）と、19世紀中ごろに、古九谷の再興を目指して築かれた吉田屋窯（のちに山代温泉に移る）の窯跡があります。

加賀はおいかが？

アイスの道がある温泉

菊の湯アイスキャンディー

昔から茶道が盛んな石川県民には甘いもの好きが多く、アイスの消費量も全国トップクラス。そんな石川県の端にある山中温泉で、入浴後に冷たいアイスも楽しんでもらおうと、2017年に「アイスストリート」が誕生しました。

温泉街には、硫酸塩泉の源泉の湯を利用したアイスキャンディー、地元の酒粕やお茶を使ったアイスなどのご当地アイスを楽しめるお店が36店（2022年現在）も並び、街おこしにひと役買っています。

他のスポット例
●山中座　●芭蕉の館　●無限庵
●医王寺　●山中うるし座　など

1章 加賀市を知ろう！ 文化スポットとSDGs①

テーマ① SDGsから見た北前船

北前船とは

北前船は、**江戸時代中ごろから明治時代後半にかけ、西回り航路を利用して日本海を行き来した商船**です。江戸時代、大量の物資の輸送手段は回船が中心でした。18世紀に入る頃には、北海道と大阪の間の航路として、危険の多い津軽海峡を抜ける東回り航路よりも、日本海を航行して関門海峡から瀬戸内海を通る西回り航路のほうが、距離は長いが安全で費用もおさえられるため、多く利用されるようになりました。

北前船の大きな特徴は、運賃を得て物資を運ぶだけの他の回船とは異なり、**寄港地で船主が直接売買する「買い積み」をする船**だったことです。荷主でもある船主たちは、常に遭難の危険と隣りあわせで損失が出たときは自ら全て負いましたが、その代わり利益も莫大で、一度の航海で現在の1億円ほどをもうけることもありました。橋立などの日本海沿岸の港町には、ハイリスク・ハイリターンな仕事で財をなした北前船の船主や商人たちの、豪壮な町並みが点在しています。

北前船は加賀や日本全国に繁栄をもたらし、産業や文化の発展に貢献しました。しかし、通信技術の普及で物価の情報が行き渡ったこと、蒸気船の発達や1891年（明治24年）の東京～青森間の鉄道の開通による輸送手段の変化などをきっかけに衰退しはじめ、1904年（明治37年）日露戦争が勃発して北海道海域の危険が増した頃、歴史を終えました。

北前船の里資料館

加賀市のSDGsを体験しよう

北前船文化がもたらした地域の発展を学ぶ

北前船の栄枯盛衰から、社会と経済生活の変化について考えよう

江戸時代中ごろから明治時代にかけて、北海道から大阪を西回りで航行し、各地の港を結んでいた北前船。単純に積み荷を運ぶためだけでなく、寄港地で物品の売買をしながら各地にさまざまな物品や文化を流通させ、日本の繁栄に大きく貢献しました。そのような重要な役割を担っていたからこそ、日本遺産にも認定されています。

北前船によって各地域に多様な物品や文化が流通した結果、日本海側の多くの港が栄えました。この橋立の地域経済も発展し、過去には「日本一の富豪村」と呼ばれていました。日本全国に誇る山中漆器や九谷焼などの伝統工芸を育み、地域と文化の発展にも大きな貢献をした存在が北前船だったのです。

この体験プログラムでは、北前船によってどのような品物が運ばれたのかを学び、北前船を通じてどのようにして各地に文化が広がっていったかについて触れます。また、当時の商売の様子や状況などを踏まえて、周辺のエリアも見学します。北前船の歴史を学びながら、持続可能な経済成長のあり方や地域間経済の結びつきについて考えるプログラムです。

橋立の町並み

北前船と橋立エリア

近世前半まで半農半漁の集落だった橋立では、多くの船乗りが近江（現滋賀県）商人に雇われていました。橋立の船乗りたちは春になると大阪まで徒歩で移動し、大阪や敦賀（福井県）から近江商人の仕立てた船に乗って航海に出ていましたが、18世紀半ば頃から自前で船を持ち、北前船の船主となる者が現れはじめます。1796年（寛政8年）の記録には42名の船主や船頭の名前が確認できます。

江戸末期から明治中期の最盛期には、規模の大きな屋敷が並びました。外壁を潮風に強い船材を再利用した板で覆い、切妻造に赤瓦の屋根、「オエ」と呼ばれる大広間など、橋立特有の様式が目立ちました。裕福になった船主たちが邸宅を構えた橋立は、**「日本一の富豪村」として発展**していきました。橋立には今も、最高級の建材が使われ「北前船の里資料館」となっている酒谷長兵衛住宅、蔵六園として公開されている酒谷長一郎住宅などの豪邸が多く残っており、往時の雰囲気や歴史を感じることができます。出水神社や港へ向かう通りでは、春先に大阪へ出立する船乗りたちが船絵馬を奉納して航海の無事を祈ったり、家族や村人たちが主人を見送ったり出迎えたりしたことでしょう。

橋立船主集落の中心部は、国の重要伝統的建造物群保存地区です。また、北前船にまつわるストーリーは、文化庁の日本遺産に認定されています。北前船を中心に営まれていた人々の暮らしを想像しながら、町並みを歩いてみましょう。

北前船の運んだもの

北前船は、当時稲作が行われていなかった**松前藩（現在の北海道）に米や塩などの食料や、織物、鉄や紙などの生活物資を届け、北海道からは昆布や、ニシン・サケなどの海産物を持ち帰りました**。北海道の昆布は福井県の敦賀などから各地に運ばれ、西日本の和食文化の土台となりました。

各地で特産品を買い積みしながら**大阪と北海道を往復する**北前船は、「動く総合商社」のような存在で、寄港地には各地の特産品が集まり、問屋ができました。昆布巻きや昆布締めのように、別の土地の特産物を利用した新たな加工品も生まれました。北前船は、現代まで続く産業や経済の発展に大きな役割を果たしたのです。

北前船は音楽も運んでいます。山中温泉の山中座で演じられる民謡「山中節」は、冬の間、湯治に訪れた橋立の船乗りたちが、温泉の女中たちに北海道の江差追分を伝えたものが元になっていると言われています。

あなたの地域にも、北前船とつながって発展した特産品や文化があるかもしれませんね。確認してみましょう。

加賀はおいしかが？

重要なものを守る 船箪笥

北前船の船主たちは、現金や手形、印鑑などの財産を、「船箪笥」と呼ばれるトランクに入れ、船に乗り込みました。

船箪笥は、漂流にも耐える優れもので、高い気密性のため中まで浸水しない、頑丈な構造をしています。航海中に難破したときは真っ先に海に投げ入れられ、財産や重要書類を後から回収できるようになっていました。

加賀市のSDGsを体験しよう

加賀市の旅館で和食文化を体験する

北前船が運んできた食材が発展させた和食を味わおう

四季折々の山海の幸に恵まれ、おいしい和食で有名な加賀地方。ニシンの昆布巻きや白身魚の昆布締めは、北前船が運んできた北海道の昆布やニシンによって誕生したものです。昆布巻きは内臓を取り出して干した「身欠きニシン」に昆布を巻いて甘辛く煮込んだもの、昆布締めは魚を昆布で挟んだもので、昆布のうま味がうつることで食材の傷みを防ぎ、保存食として重宝されました。どちらも、北陸地方などの各地で発展しながら継承されてきました。

和食はユネスコの無形文化遺産に登録されています。和食の大きな特徴の一つに、昆布などのだしが生む「うま味」があります。この「うま味」を生かして健康的な調理をしていることが、認定の大きな理由の一つになりました。北前船が運んだ昆布が和食文化のいしずえとなったのです。

この体験プログラムでは、北前船由来の料理をはじめ、旬の加賀野菜や日本海の魚などを用いた本格的な和食を味わいます。食事を楽しみながら、和食文化の奥深さ、陸や海の資源の豊かさ、それらを守って未来につなげていく方法を考えます。また、北前船が貢献した食材の供給と食生活の向上の歴史を知り、これからの持続可能な食料の供給について考えます。

ニシンの昆布巻き
出典：農林水産省Webサイト（https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/k_ryouri/search_menu/menu/nishinnokobumaki_ishikawa.html）

日本海の海の幸を使った和食

1章 加賀市を知ろう！

文化スポットとSDGs②

テーマ② 伝統工芸とSDGs

九谷焼

国内外で高い人気を誇る九谷焼は、**加賀市など南加賀地方で焼かれる磁器**です。江戸時代初期の1655年頃に、**大聖寺藩主・前田利治が、加賀国江沼郡九谷村（現在の加賀市山中温泉九谷町）の鉱山開発の際に発見された陶石を焼かせたことがはじまり**と言われます。大聖寺藩は九谷焼制作に力を入れ、1710年頃までの間に全面に青手や五彩手と呼ばれる色絵を施した独創的で絢爛豪華な磁器が数多く制作されました。この約半世紀間に制作された磁器を**「古九谷」**と言い、大聖寺の九谷焼美術館では、古九谷の数々の名品を見ることができます。

古九谷の歴史は18世紀初めで途切れますが、約100年後の19世紀初め頃から、金沢や加賀の地で古九谷にならった磁器が再び焼かれるようになりました。これを「再興九谷」と言います。再興九谷では、赤絵や金を加えた金襴手といった新しい技法も加わり、現代の九谷焼の直接の起源となっています。山中温泉や山代温泉では、大聖寺の豪商・豊田伝右衛門が古九谷の美の再現を志して築いた「吉田屋窯」の窯跡を見学できます。

市内の九谷焼の窯元や工房では、多くの職人たちが技をふるっています。美術館やギャラリーはもちろん、浴場のタイルや町なかのベンチで、旅館やレストランの食器として、そして家庭の食卓でも広く使われている様子からは、九谷焼が古くから加賀の暮らしに根付いていること、加賀の人々に愛され大切にされてきたことが伝わってきます。

山中漆器（山中塗）

茶道具「棗」

山中漆器は「山中塗」とも呼ばれ、国指定の伝統的工芸品で、加賀市内で生産されています。その歴史は古く、**450年以上前の安土桃山時代、越前の木地師（ろくろを使って木材から器物を作る職人）が山中温泉の上流にある集落に移り住んで始まったと伝わっています**。その木地挽きの技術はろくろを巧みに使うことで名高く、石川県産漆器の「塗りの輪島」「蒔絵の金沢」と並び、**「木地の山中」**として高く評価されています。表面に筋や渦巻き模様を施す「加飾挽き」や極限まで薄く挽く「薄挽き」など繊細な細工が特徴で、木工芸で唯一の人間国宝「川北良造」氏など多くの名工を輩出しました。木製の素地に漆塗りを施す木製漆器は木地挽きの技術に加え、江戸時代に京都や金沢などの漆塗りや蒔絵の技法を取り入れ発展し、茶道具の「棗」など繊細な技術が全国で評価されています。

戦後、プラスチック樹脂の素地にウレタン塗装を施す近代漆器の制作にもいちはやく取り組んだ山中漆器は、木製漆器と合わせると、漆器生産量全国一を誇っています。近年ではこれらの技術を活かした木製の素地にウレタン塗装を施した食器やガラスやステンレスカップなどに漆塗りを施した製品を作るなど、独自の技術で現代にマッチした製品を作り続けています。

加賀市のSDGsを体験しよう

伝統工芸「九谷焼」の未来への継承を学ぶ

九谷焼の歴史を学んで、伝統工芸の継承について考えよう

色絵で有名な「九谷焼」は加賀市が発祥の地と言われます。歴史は古く江戸時代にまでさかのぼり、大きくは江戸時代初期から半世紀ほどに焼かれた「古九谷」と、約100年後から始まり現代の九谷焼につながる「再興九谷」とに分かれます。「青手」「五彩手」「金襴手」などの昔ながらの技法を駆使した製法は完成までに長い時間と労力がかかり、一点ものの九谷焼の美しさは、まさに芸術品です。

この体験プログラムでは、本物の九谷焼を鑑賞し、九谷焼がどのように始まり継承されてきたかという歴史に加え、担い手の育成や低価格で買いやすいものの生産など、継承のためのさまざまな取り組みを学びます。その後、実際に九谷焼の絵付けを体験します。希少価値の高い伝統工芸品への理解を通して、物を使い捨てにせず一生ものとして大切にする精神を学び、伝統を未来へ継承するためにはどのような取り組みが必要かについて考えるプログラムです。

石川県九谷焼美術館に展示されている作品

テーマ③ 雪の科学館とSDGs

中谷宇吉郎（1900～62）

石川県江沼郡作見村字片山津（現在の加賀市片山津温泉）で生まれた中谷宇吉郎は、世界に先駆け**雪氷学の分野を切りひらいた雪博士**として知られています。東京帝国大学で物理学を専攻、物理学者・寺田寅彦に師事したのち、32歳で北海道大学教授に就任して雪の結晶の研究を始めました。中谷博士は北海道の山小屋などで雪の観測を続け、あらゆる雪の結晶を写真にとり、どんな気象条件でどんな結晶ができるかを観察・分類しました。そして1936年、36歳のときに**人工雪の生成に世界で初めて成功します**。実験は、ビーカーの水を温めて上昇した空気中の水蒸気が冷え、つるしたうさぎの毛にできる結晶を観察するという方法で行われました。この実験で、温度と水蒸気量を変えると生成される結晶の形が異なるという自らの仮説を証明しました。中谷博士は、その後第二次世界大戦中も、凍上（土の中の水分が凍って地面や線路が盛り上がる現象）や着氷防止、霧消しの研究などの寒冷地での現象や問題の研究を次々に進め、戦後も北海道やアメリカやグリーンランドなどで雪や氷の研究を続けました。

赴任した地の北海道の雪害を解消しようと始めた凍土の研究は、鉄道の凍上の問題を解決し、人々の生活を大きく改善しました。これらの研究は、雪の多い中谷博士の故郷の加賀市の暮らしにとっても欠かせないものです。中谷博士の研究の成果は過去の気候変動の分析も可能にしており、地球環境のこれからを考えていくうえでも大きな貢献をしています。

2024年春以降、北陸新幹線の金沢～敦賀駅間での延伸事業により、加賀市を新幹線が通るようになります。寒い地域では、線路にも凍上現象が起こることがありますが、こうした課題の解決にも、中谷博士の雪や氷の研究が役立てられているのです。

加賀はおいしかが？

北陸の冬の味方 融雪装置

道の真ん中から水を噴き出して雪をとかす「消雪パイプ」は北陸の冬の風物詩。天候や気温を感知して作動します。消雪パイプによる融雪は、雪は多くてもさほど気温が低くない北陸だからできる方法で、北海道のように寒冷な地域では、とけた水が瞬時に凍り、さらに危険が増してしまいます。

加賀市のSDGsを体験しよう

雪と氷の不思議な実験観察体験

中谷宇吉郎が感動した雪の結晶の美しさに触れよう

中谷宇吉郎 雪の科学館

中谷宇吉郎の故郷である片山津温泉の白山を望む柴山潟のほとりには、雪の結晶をイメージした六角塔が3つ連なる「中谷宇吉郎雪の科学館」が建てられており、中谷博士の業績を学んだり、雪や氷の実験を楽しんだりすることができます。随筆家でもあった中谷博士は、「雪は天から送られた手紙である」という言葉や、多くの著作も残しています。中谷博士の生涯と功績について知ることができるドキュメンタリー映像では、初期の雪の結晶研究の様子も放映され、実直に研究に向き合った彼の姿勢が伝わります。

施設内ではダイヤモンドダストを再現する実験や過冷却水を使った実験などさまざまな実験が解説とともに実演されており、雪や氷の不思議を体感できます。また、Murai式人工雪生成装置（村井昭夫氏考案。中谷博士が作った「対流型」と呼ばれる方式が踏襲されたもの）では、雪の結晶が形作られる過程を見ることができます。中谷博士も感動した雪の結晶の美しさを、モニターに映し出された映像からリアルタイムで体感できます。金属の熱をよく伝える性質を利用した氷のペンダント作りでは、実際に自分で楽しみながら氷や金属の特性についても学ぶことができ、自然科学をより身近に感じられます。

雪や氷の美しさや不思議さに触れる体験を通じて得た気づきや学びは、身の回りの環境や私たちの暮らしについても考えるきっかけとなります。

2章

加賀市の探検準備

事前学習①

探究ポイント　温泉街を歩こう

温泉街を回るときの行程を考えましょう。どの街でどのスポットをいくつ回るか、移動時間はどのくらいかかるか、休憩時間をいつ・どのぐらいはさむかなどを考えて行程を決めていきましょう。また、それぞれの行き先で、見どころや気になったこと、疑問に思ったことなどを訪問前に書き留めておきましょう。

訪れるエリア・スポット

街歩きのテーマ

メモ

行程

※記入欄が足りない場合は、付せんなどに書いて貼りましょう。

時間	場所	メモ
：～： 移動（　　分）		
：～： 移動（　　分）		
：～： 移動（　　分）		
：～： 移動（　　分）		
：～： 移動（　　分）		

加賀はおいかが？

夏の訪れを告げる氷室まんじゅう

皮の3色の意味には諸説ある

7月1日が近づくと加賀や金沢（かなざわ）の和菓子屋さんに並ぶ、白・赤・緑の3色の皮の氷室（ひむろ）まんじゅう。初夏の風物詩で、学校給食に出されることもあります。

冬に降った雪や氷を夏まで貯蔵しておく岩穴などの保冷庫を「氷室」と言います。江戸時代、加賀藩は7月1日（旧暦6月1日）になると、氷室を開けて氷を取り出して食べたり幕府に献上したりして、暑気払いをしていました。この行事を「氷室開き」と言い、明治時代には氷室開きの際に無病息災を願ってまんじゅうを食べるようになりました。この風習が今も受け継がれているのです。

2章

加賀市の探検準備

事前学習②

探究ポイント　加賀市の探検の準備をしよう

加賀市での学びを、「探検」から始めていきましょう。探検とは、現地に実際におもむいて、自分自身で体験したり見聞きしたりすることです。探検は、さらなる次の課題に目を向けることにつながっていきます。このように、思考と経験を反復していくことが、自ら物事を深く考えていくきっかけとなります。

ここでは、加賀市で訪問する施設や体験することについて、事前に調査してまとめておきましょう。

訪問先・体験

訪問先・体験について調べたこと

もともと知っていたこと

調査したあとの印象の変化や、わかったこと

知りたいこと、質問してみたいこと

探究ポイント　「加賀ならでは」を見つけよう！

加賀市の探検では、「加賀ならでは」を探してみましょう。「ならでは」とは、町の中で見つけた独自な取り組みや、あるいは、「これ、なんか変！」と思ったところ、違和感があるところなどにひそんでいる“その土地に根付いている特別なこと”。自分が暮らしている地域と比べてみてもわかりやすいでしょう。

気になったスポットは、ぜひ写真を撮っておきましょう。

※今の段階で、加賀について気になった言葉や関心をもったことと、その理由を書き留めておきましょう。

加賀の「温故知新」を見つけよう！

「温故知新」は、「故(ふる)きを温(たず)ねて新(あた)しきを知(し)る」と読みます。昔からある要素から学び直すことで新しいものを生み出す、あるいは、古いものと新たなものとを融合させて進化させていく、という考え方です。旅行中は、現地で発見したものに、どのような「故き(昔からある要素)」と「新しき(新しく取り入れられた要素)」が、どのように組み合わさっているのかを考えながら探検してみましょう。

加賀市に暮らす人々の昔からの知恵や思いをくみ取り、そこにどんな新しいものが組み合わさっているかを考えましょう。それが、さまざまな文化が融合して育まれた加賀市の歴史を振り返り、加賀市の魅力を見つけることにつながるのです。

旅行中に見つけた「温故知新」は、次の18･19ページでメモしておきましょう。

訪問したい、魅力的だと思うスポットは、どんなところが新しくて、どんなところが昔からのいいところを守っているのかな？

3章

加賀探検中の気づき

現地学習

メモ　現地での体験から感じたことや気づいたことを書き留めよう

加賀旅行の現地での探検で学んだことや発見したことを、このページにメモしておきましょう。メモするときは、新たに知ったこと、感心したこと、考えたことなど、自分がどう思ったかをもとに、次の4つのエリアに分類しておきます。旅行から帰った後、振り返るときに役立てましょう。

何それ！おもしろい！

※見聞きしたもののうち、興味がわいたもの、わくわくしたことを書きましょう。

愛があふれてる

※地元の人たちの愛を感じたこと（郷土愛）や、
昔から受け継がれてきたことについて書きましょう。

深イイ

※歴史を知ってしみじみとしたこと、感動したことなどを書きましょう。

目からうろこ

※新たに発見したことや裏話などから、
自分の気持ちが変化したり驚いたりしたことについて書きましょう。

4章 加賀市で学んだこと

事後学習①

探究ワーク 見つけた「加賀ならでは」の魅力SNAP！

現地で見つけた「加賀ならでは」の写真を貼りましょう。どうして「加賀ならでは」と思ったのか、どんな魅力があるかなどを、SNSに投稿するときのようにハッシュタグ(#)で自由に表現してみましょう。記入欄が足りないときは、空いているスペースも使ってかまいません。

#

#

#

#

撮影場所

探究ワーク 加賀市の魅力を守るために

加賀市での探検をもとに、発見した加賀市の魅力をまとめましょう。温泉地での町歩きから感じたこと(A)と、訪問した施設や体験したことから感じたこと(B)を、それぞれ「魅力ポイント」としてひとことで表します。次に、AとBの魅力から共通点を見出し、その共通点を、「加賀市が次の世代に残したい魅力」として文章にまとめましょう。そして、A・Bの共通点である魅力の中の、どんな部分が「温故知新」(17ページ参照)に当てはまるかを考えてみましょう。

A 温泉地に見つけた魅力ポイント

×

B 歴史・文化に見つけた魅力ポイント

加賀市が次の世代に残したい魅力

AとBの共通点

「故(ふる)き(昔からある要素)」はどんなところ？

「新しき(新しい要素)」はどの部分？

4章

加賀市で学んだこと

事後学習②

探究ワーク　自分たちの地域とのつながりを考える

自分が現在暮らしている地域で、加賀と同じように魅力を持続して守っているスポットを探してみましょう。そのスポットと加賀のスポットとの共通点と、その根拠も書きましょう。

自分の暮らす地域や、地域にあるスポットを挙げて、そこにひそんでいる「○○ならでは」を書いてみましょう。また、そこにはどんな「温故知新」が組み合わさっているかも考え、下の「故き」と「新しき」の欄に書きましょう。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ ならでは

「故き（昔からある要素）」はどんなところ？	「新しき（新しい要素）」はどの部分？

加賀はおいかが？　片仮名入りの不思議な住所

石川県の住所の表記には、「甲乙丙」などの漢字や「イロハ」などの片仮名が入っていることがあります。例えば、加賀市役所の番地は「加賀市大聖寺南町ニ41番地」です。県内には、十二支の「子丑寅卯……」や儒教の徳目「仁義礼智信」が使われている地域もあります。県外の人から見ると不思議に感じますが、生まれ育った県民にはあまり違和感はないようです。

このような住所表記の理由ははっきりとはしていませんが、江戸時代以前から土地の呼び方にこれらの漢字や片仮名が使われていました。1873年（明治6年）の地租改正で課税のため土地に番号を付けたときにも、これらの古い呼び方がそのまま残ったという説などがあります。千葉県にも片仮名の「イロハ」が用いられている市町村があります。自分の住む地域の住所にも注目してみると、「ならでは」の表記が見つかるかもしれません。

左ページで挙げた、自分の暮らす地域の「ならでは」を守るために、課題となっているのはどんなことでしょうか。何が必要なのかを考えましょう。

加賀と自分の暮らす地域の「ならでは」を守っていくことが、持続可能な社会を考える始めの一歩になります。そのために、今の自分に何ができるでしょうか。考えてみましょう。

持続可能な未来のために、どんな大人になりたいと考えるでしょうか。加賀市での探検で出会った人々の話や印象、自分自身が変化したこと、意識するようになったことなどを踏まえて、理想とする人物像を書いてみましょう。